

Dealing with anxiety in the globalized era: some reflections on the joint workshop

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: NAKANO, Ryoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00059403

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



グローバル時代における不安とその対処策

—合同ワークショップを振り返って—

中野涼子

はじめに

グローバル化が進む現代社会において、文化・宗教・民族意識などに規定されるアイデンティティの対立が世界の分断を招いていると指摘されるなか、各所で、その対立の背後にある人々の不安への関心が高まっている。人々の不安それ自体は古くから存在したものであるが、通時代的に共有され得る古典的な「不安」とともに、現代社会に特有の新しい「不安」の存在も顕著になってきた。仮にそうした「不安」が現代社会における様々な問題に関連しているのだとすれば、人文・社会科学は、次の3つの課題、すなわち、(1)社会における不安の可視化、(2)不安の拡大・深化プロセスの解明、(3)不安に関連する諸問題への対応とその問題点の考察に取り組む必要がある。

このような問題意識をもって、金沢大学ポトムアップ型研究課題「グローバル時代の不安と希望」の研究グループと南山大学社会倫理研究所は、2020年1月11日から12日にかけて「グローバル時代の不安とレジリエンスの倫理的基盤の探究に向けて」と題した合同ワークショップを開催した。本ワークショップでは、人文・社会科学の諸分野、とりわけ、文学、歴史学、国際関係論、経済学、政治学、哲学の多様な観点から、上記に挙げた3つの課題に取り組んだ。以下は、その報告者と題目である(報告順)。

中野涼子「存在不安から考える国際政治」

結城正美「人新世をめぐる不安——環境人文学の見地から」

山口善成「友情について——19世紀アメリカにおける信用と個人主義」

古泉達矢「1920～21年の華北早魃と威海衛」

田邊浩「後期近代における不安」

岡本宜高「衰退への不安と大国意識——1970～80年代とイギリス」

様々な環境の変化や危機的状況などに対して人や組織がどのように対処するかという問題は、南山大学社会倫理研究所が長年の研究プロジェクトとして取り組んできた「レジリエンス」(通常、回復力、弾力性と訳されている)の概念とも接続するものである。議論の内容は多岐にわたり、それぞれの報告については個別の考察が求められる。以下では、本ワークショップ企画者としての立場から全体を総括することに重きを置いて、全体を振り返ることにする。筆者は国際関係論を専門としており、領域横断的な今回の議論について精緻な検討を加えることはできない。しかし、あえて専門外の領域について語るという禁じ手を行うことで、今後の議論の発展につなげようとするものである。適宜、報告者の名前を付すことで筆者が得た知見の出所を示すが、本文の文責は全て筆者にあることを付言しておく。

第1節 不安とは何か

不安は身近に存在するが、同時に、つかみどころないものでもある。社会学者のジークムント・バウマン (Zygmunt Bauman) によると、それは不確実性、不安定性、危険性に関係するものとして定義される¹。別の言い方をすれば、これまで当たり前と思っていたものが当たり前でなくなるという非連続性の感覚や、自分の物理的もしくは精神的な安全・安心が損なわれている(かもしれない)という感覚に基づいている。不安には様々な形態があるが、その出どころがアイデンティティなどの人間の内面に強く結びついているものと、そうで

1 ジークムント・バウマン、森田典正訳『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店、2001年。

ないものに分けられる。合同ワークショップでは、これら両方の不安について言及された。

人の内面に関する不安

人間の内面的なものと結びついた不安に関しては、近代以降の世界という歴史的な文脈に留意する必要がある、その世界のもとで形成されたアイデンティティがキー概念となる。アイデンティティとは、エリクソンのアイデンティティ理論が示すように、他者や社会との関係性の中で形成されるものである²。社会的文脈におけるアイデンティティの不安について理解するには、バウマンの他、リチャード・セネット (Richard Sennett) やアンソニー・ギデンス (Anthony Giddens) などの社会学者からの知見が役立つ (田邊報告)。それによれば、人は、絶え間なく変化する社会の中で他者との関係を築けなかつたり、自分の居場所を見つけれなかつたりする場合、見捨てられるという感覚を持ち、不安に陥る。また、不特定多数の見えない他者の目に怯えて、精神的自立を達成できずに不安の波に飲み込まれるといった状況も想定される。

「国民国家」なるものが政治システムとしての機能を担うようになると、様々な媒体を介して、ナショナリズムという、国民共同体・ネーションという集合体への帰属意識が組織的に形成される。ナショナル・アイデンティティは、国家が公的に認めてきた記憶に支えられており、そうした記憶がちりばめられた公的文書や政治指導者のスピーチ、さらにはメディアや文化物に触れることで、人々は国民としての自己認識をもつようになる³。そして、ナショナル・アイデンティティの強化を意図的に試みる政府は、そのアイデンティティを支える公的な記憶に対する内外からの挑戦を不安の種とみなして、それを取り除くた

2 エリクソンのアイデンティティ理論に対するポストモダニズムからの批判があるのは看過できないが、社会と個人の相互作用に関する指摘は現代においても重要である。河井 亨「E. H. Erikson のアイデンティティ理論と社会理論についての考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第59号、2013年、639-651頁。

めの措置を正当化する(中野報告)⁴。また、1970年代イギリスのサッチャー政権による「強いイギリス」復活のスローガンの背後には、人々の現状への不安やイギリスの衰退に対する危機意識が存在すると考えられるが、同時に、他の要素も重なり合って人為的に形成された部分が多くある点にも注意を向けなければならない(岡本報告)。

外的環境に関する不安

上記に挙げた不安に対して、第二の不安は、必ずしも社会的関係やアイデンティティの衝突の中で出現するものではない。ここで言う不安は、人を取り巻く自然環境や社会の急激な変化によって引き起こされるものである。たとえば、自然環境の変化に関係する不安は、気候変動やそれによる自然災害や原発事故が起こった場合、あるいは起こるかもしれないと考えることによって浮上する。「人新世」(人類が地球に限なく影響を及ぼす時代；アントロポセン⁵)や「ポスト人新世」という概念は、人間の営みが地球環境を破壊するだけでなく、現代文明が終焉する段階まで来ているかもしれないことへの不安、そして、そのような終焉のシナリオに科学技術の改善を通して対応することへの希望あるいは懐疑を背景にしたものである(結城報告)。こうした人新世をめぐる錯綜した

-
- 3 人々は国民共同体に属することを当然視するナショナリズムの形成に、マスメディアが大きな役割を果たしているというアンダーソンの「想像の共同体」に関する議論は、よく知られたところである。ベネディクト・アンダーソン、白石さや、白石隆訳『想像の共同体』NTT出版、2007年(原著1991年、旧版は1983年)。もっとも、ナショナリズムを形成する言説は複数存在するのであり、言説間の対立については別途検討する必要がある。
 - 4 マルクソフは、公的な記憶への挑戦が記憶の「安全保障化」(securitization of memory)を引き起こす点を、ヨーロッパの事例によって示している。Maria Mälksoo, “‘Memory must be defended’: Beyond the politics of mnemonical security,” *Security Dialogue* 46: 3 (2015), pp. 221-237.
 - 5 人類が地質的環境に大きな影響力をもつようになった過去3世紀の地質時代の区分として「人新世」ということばが、パウル・クルツェン(Paul J. Crutzen)などの科学者から提示された。

不安を可視化する上で、文学的表象の分析は一つの手立てとなりうる。たとえば、『風の谷のナウシカ』で描かれる腐海は、ポスト人新世の表象といえるものであり、腐海をめぐる捉え方の相違に不安の多元的表出が読み取れる。

また、社会環境の急激な変化を背景に生まれる不安とは、国民などの集団的アイデンティティを固定化させる力が強く作用する近代とは異なる世界における不安を指す。これは、常に物事が変化する後期資本主義社会（ハウマンが言うところの「リキッド・モダニティ」の世界）において、他者との確固たる関係の構築が困難であることが問題として認識されている（田邊報告）。テクノロジーが発達することで他者との関係が希薄になり、自己アイデンティティが宙に浮いた状態になることは、極めて現代的な不安であると言えよう。

第2節 不安への対処法

様々な不安が拡大・深化していく中で、人、社会、そして国家は、どのように対処すべきであろうか。対処法は大きく3つに分けられる。

第一の方法は、不安の原因を特定した上で、それを制御しようとするものである。不安を可視化する、というのは本研究プロジェクトの目的のひとつでもあるが、言葉にしがたい不安を文章で明示し、その内容を整理する作業を通じて、不安に対処する方法を論理的に導くことが考えられる。意識的な不安の解消・制御は人間に備わる一つの性質であるとはいえ、それが体系的に行われるようになったのはジョン・バージャー（John Berger）が言うところの「進歩の文化」（Culture of progress）が浸透する近代以降である⁶（結城報告）。「進歩の文化」とは、人類が継続的に進歩の道を歩むために自然を切り拓き、管理することで自然界を人間の手中におさめ、それによって不安の解消を試みるというものである。ここでは、人間は自然の一部なのではなく、自然を支配する存在として

6 John Berger, "Towards understanding peasant experience," *Race & Class* 19: 4 (1978), pp. 345-359.

位置づけられる。

「進歩の文化」の人間について考える場合、アメリカの個人主義者を参照すると具体的なイメージがわかりやすい。人とのつきあいには不安がつきものであるが、その不安を積極的に制御しようとしたのが彼らである（山口報告）。たとえば、日本の知識人である新渡戸稲造などにも大きな影響を与えたラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson) は、人間関係にまつわる不安を、制度化された社会的関係と理想化された友情のイメージの中に昇華させようとした。エマソンが理想とする人間像は、いわば個人の外に位置する自己を管理するアクターであり、人づきあいにつきまとう不安さえ意識的に克服されるべきものなのである。

技術革新によってデータの保存や共有が容易になると、不安に対する対処法も極めて近代的な様相を帯びる。政府・行政組織は、人々の不安に対応するためにはその上位構造に位置する人々に理解されるような文章化のプロセスを踏む必要があり、ときには専門家の協力を仰ぎながら、声なきものの不安に応えることが求められる。19世紀に起こった中国・山東半島の先端に位置する威海衛の大飢饉に対してその統治者であるイギリス帝国主義者が行った政策も、これに分類される（古泉報告）。

ここで注意しなければならないのは、国家の組織が人々に対して説明責任を果たす際に、不安の原因が見える形で解消・制御する、あるいはそのように見せるための政治的な力が働く点である。そして、国民の支持を集めることを最優先にして政策が実行された場合、実際には政府の存在意義を高めるという目的に資するだけで終わってしまうこともある。その意味で、何者かによって不安が意図的に誇張されていないか、そのことを判断するために不安が何によって形成されているのかを検証する必要がある。これは、社会や政治の改善を目的とする市民運動にも言えることである。たとえば、被害者救済のための運動を組織する人が、被害者本人の意思と異なる形で不安を対外的に表現したり、不安をあおることで運動を継続させたりすることがある。運動を組織する人が

心理的操作を行うことを意図していなかったとしてもそのような状況が生まれるのは、関係者間の認識のずれを解消することの困難を示している。

第二の不安の対処法は、不安の原因を特定・制御できない、あるいは、その必要がないと考え、不安のある状態を受け入れて適応しようとするものである。この方法は、主観や経験を重視するものであり、その原型を、バージャーが「進歩の文化」と対比させた「生存の文化」(Culture of survival)に見ることができる(結城報告)。この文化においては、人を含めて、生きとし生けるものが死んでいくサイクルを所与のものとして受け入れる態度が根底にある⁷。「生存の文化」の人間として想定されているのは、何世代にもわたって体得してきた経験を重視する農夫である。農夫は、蓄積された経験と絶えざる観察にもとづいて、天候や社会状況など不安の要素となる不確実性に対応する。不確実性を排除するのではなく、ある程度受け入れることで、不安が人間を破壊するような大きな恐怖に転換することを防ぐのである。

「非近代」⁸の社会における上記の対処法は、個人と社会との関係が不安を規定する近代以降にはもはや通用しないように見える。しかし、不安の存在を当然とみなして生きることを選択するのは、近代以降の世界においても可能である。ギデンスは、不安への対処法として、リスクを真摯に受けとめながら、社会運動を組織しようとするなどの「徹底した社会参加」を望ましいものとして示した(田邊報告)。ここでは人間が主体となる積極的な活動が強調されており、人間を独立した存在として扱っている点で、「非」近代の「生存の文化」とはかなり異なるものではあるが、不安を不安としてそのまま受け入れる、という点では共通している。そして、自然環境も含めた社会の変化に適応していく能力

7 Berger, "Towards understanding peasant experience."

8 ここで、「非近代」という表現を使用しているのは、一般に知られている近代とは別の、もう一つの近代という意味を含ませるためである。結城によると、「生存の文化」を「前近代」と結びつけることは、その文化・論理の可能性について学術的に考察する意義を薄める危険性がある。

や態度は、アイデンティティを固定化する動きとは反対のベクトル、すなわち、アイデンティティが可変的、多元的であってよいことを積極的に承認するものである⁹。特定の個人あるいは国家に対して社会的に付与されたアイデンティティが脅かされる状況に直面しても、それを受け入れる態度を持つことが重要であると考えられる。

不安への第三の対処法は、不安に対処せず、不安が高まるにまかせて、最終的には機能不全、すなわち、発狂に至るというものである。テネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams) の小説『欲望という名の電車』の主人公・ブランチが人間関係の葛藤の末に正気を失ったのは、悲劇のように見えると同時に、彼女にとってある種の救いであったとも考えられる (山口報告)。もっとも正気を失うことは、人が自覚的に選択することのできるものとは言えないため、対処法という表現は不適切かもしれない。にもかかわらず、あえて3つ目の方法として提示するのは、正気を失うことが必ずしも不幸であるとは限らない、という考えを残すことの重要性にある。不安に対処しなければならないと考えれば、逆にそれが強迫観念となって不安を増幅させるため、不安に対処しないということは、逆説的に、不安に対する1つの対処法となり得る。

おわりに

本ワークショップ開催後に、新型コロナウイルス感染拡大に関する不安が世界的に広がった。そして、国際機関などを通じた統一的な対策がとられることがなく、米中間の非難合戦に見られるような国家間の対立が、今後の国際秩序のさらなる分断を暗示しているようである。また、世界的な感染者の増大に対する不安の裏返しのように、人種、地域、職業などによる人々の差別化がウイルスへの不安と結びついた排他主義的な動きも見られる。これは、人を「ばい

9 たとえば、Christopher. S. Browning & Pertti Joenniemi, "Ontological security, self-articulation and the securitization of identity," *Cooperation and Conflict*, 52: 1 (2017), pp. 31-47を参照。

菌」扱いする子どものいじめとどれほどの違いがあるのか。このような状況においては、不安を制御しようとするほど不安に陥るというジレンマも生じる。

本ワークショップから得た知見に基づいて考えた場合、最初に言えるのは、ウイルス感染に対する不安に作為的なものはないのかを疑ってみることである。ウイルスの感染拡大に対して不安を抱くこと自体は自然であろうが、それがメディアなどによって誇張・強調されることで、不安の行き場が一定の方向——たとえば、不安の原因を特定の集団に帰着させること、あるいは、同じような行動をとらない人間を排除することの正当化——に向けられることに注意を払うべきである。不安の解消は長期にわたる試行錯誤の中で示されるものであり、プロセスを重視しない目的達成案を実行することによって生まれたはずみが、別の問題を引き起こすこともある。ウイルス感染拡大による現代社会の機能不全は、こうしたことを理解しない人間の問題点を突き付けているように見える。